

## ジェラルダインの謎

——『クリスタベル』におけるゴシシズムと言語——\*

---

小 林 徹

---

英詩の伝統において、ロマン主義の果たした役割の一つは言語改革であった。William Wordsworth と Samuel Taylor Coleridge による、所謂英国ロマン主義運動宣言 *Lyrical Ballads* (1798) の趣意書きが、そのことを直截に語っている。そこでは、ワーズワスは、自分たちが従来とは全く異なる詩的言語を用いていることを、多分に目的的に読者に意識させようと努めている。彼の表現を用いれば、新たに採用された詩の言語は、“the language of conversation in the middle and lower classes of society”<sup>(1)</sup> である。つまり、再版『抒情歌謡集』の「序文」中でより詳らかにされるように、いわば新たな詩を書くにあたり二人の詩人は、前時代特有の“personifications of abstract ideas”や“what is usually called poetic diction”<sup>(2)</sup> を極力排除したのである。しかし、用語選択の側面においてのみ、ロマン主義を期に言語が変容したといえるわけではない。言語のその意味機能の側面においてもそのことは妥当すると考えられる。本稿では、コールリッジの *Christabel* (1797, 1801) を取り上げそれを検証してみようと思う。そしてその際には、ゴシシズムをいわばフィルターとして用い詩を分析することが有効であるだろう。全編を漂う中世の面影、迫害され行き場を失う女性主人公、数々の不可解、そして謎といった糸が織り成すゴシックの帳の向こうには、用語選択の次元とは別の、言語の新たな様態が見出せるのである。超自然的という語で『クリスタベル』とともに括られてきた *The Rime of the*

*Ancient Marinere* (1798) の世界には、言語に関わる非理性的な出来事があった。陸地に戻った老水夫は、自らの意志に拘わらず繰り返し航海の様子を語り続けねばならなかったのだ。『クリスタベル』の世界でも、同様に言語に纏わる不可思議が登場人物たちの間で発現する。そして、そうした言葉を発することについての物語性が、ゴシック伝統の後の行方と連動しつつ、言語それ自身の近代的問題性を暴露していたのである。

## I

ゴシック小説の嚆矢である Horace Walpole の *The Castle of Otranto* (1764) が定式化したゴシックの形式とは、あらまし次の通りである。時は過去、依然騎士道の価値観が残存する時代。舞台は主に城や森。18世紀後半の感受性が鋭敏に感応した懐古的環境の中、筋立てとしては、様々な不可思議との遭遇のうち美しい乙女が悪人に迫害される。また、そこにジャンルとしてのゴシックの内在的意味が根ざしている。それは、善悪の対立に見られる道徳上の問題や恐怖、神経症的倒錯、及び崇高美学との関連を含み、さらに破壊転覆願望に裏打ちされる政治的問題にまで及ぶ。<sup>(3)</sup> これらの点から『クリスタベル』もこの系譜に属する。主人公クリスタベルは、老境を迎え今は病みがちな隠遁生活を営む騎士レオラインの娘であり、婚約者である騎士の安寧を祈りに深夜出掛けた森で、誘拐され放置されたままのジェラルダインを発見し、自らの城へ連れていき介抱する。恐怖の場面は二人が寝台をともしるところである。服を脱いだジェラルダインは異形の裸体を曝け出し、さらに魔法をかけ主人公から言葉を発する力を奪い、彼女の語れない苦悩と不安のうちに詩は終る。一見して害を被るのは乙女クリスタベルである。しかもその発端である寝台での出来事が道徳的問題を内包していたことは彼女自身の言葉から明らかである。ジェラルダインとの一夜の後目覚めた彼女は“Sure I have sinn'd” (381)<sup>(4)</sup> と告白したのであった。<sup>(5)</sup>

ところで、ゴシックでのやはり重要な要素である謎においても、この詩は伝統を踏襲しているといえるだろうか。あえてこう問うのはほかでもない。この

謎という、ゴシック世界では通常超自然性と関わる側面に注視する時、『クリスタベル』において言語の意味作用上の新たな形態が見えてくるからである。この詩以前のゴシック文学では、物語の主要な方向性は謎の顕現から解消というベクトルに依存し、またその謎の扱いは殆ど単一の語り手が生み出す語りの支配下にあった。次章より詩の語り手の考察から始めて『クリスタベル』における謎の検討を行うが、最終的に注目するのは、提示された謎をその地平とする、詩と読者を取り巻く言語環境の様相である。

## II

端的にいうと、『クリスタベル』の詩の語り手は、その言語状況において主人公と対極的關係にある。彼女が魔法により言葉を失うのに対して、語り手にとり言葉を発することはむしろ過剰ともいえる域にまで達している。成程こう考えれば、語り手は所謂神の視座に在るとも認められそうである。例えば以下は主人公が初めて登場する場面である。

The lovely lady, Christabel,  
Whom her father loves so well,  
What makes her in the wood so late,  
A furlong from the castle gate?  
She had dreams all yesternight  
Of her own betrothed knight;  
And she in the midnight wood will pray  
For the weal of her lover that's far away. (23-30)

目撃している出来事ばかりか、その発生の原因や背景の事情も語り手の認識領域内にある。さらに登場人物の内面もそこに包含されるようだ。ジェラルダインの指図のままに衣服を脱ぐ主人公の様子を語り手はこう語る。

Her gentle limbs did she undress,  
 And lay down in her loveliness.

But through her brain of weal and woe  
 So many thoughts moved to and fro,  
 That vain it were her lids to close;  
 So half-way from the bed she rose,  
 And on her elbow did recline  
 To look at the lady Geraldine. (237-44)

要するに、語り手は通常の知覚能力では捕捉されない事柄さえ知ることが可能らしい。しかし、語り手は所謂全知の立場にあるとはいえ、謎の面前ではその気配すら見せないのは如何にもゴシック的だといえる。強調するまでもなく、詩中の謎とはジェラルダインという人物である。ジェラルダインには恒常的に異質性が付き纏う。一例を挙げれば、第一部クリスタベルとともに城の回廊を進む場面で、“when the lady passed, there came / A tongue of light, a fit of flame” (158-59) と語り手により指摘されている。しかし、語り手はそれの際それを単に出来事として言及するに留め、理由の説明など一切行わない。<sup>(6)</sup> そして極め付きはその身体の秘密である。

... she unbound

The cincture from beneath her breast:  
 Her silken robe, and inner vest,  
 Dropt to her feet, and full in view,  
 Behold ! her bosom and half her side ——  
 A sight to dream of, not to tell ! (248-53)

語り手が“her bosom and half her side”を直視したのは確実だが、彼はそれを語るべき光景ではないと断じ、以降は何も述べていない。ゴシックの伝統を考慮

する時、ここに至り、人物ジェラルダインが、その伝統に立つ謎としてより分  
明な形で顕現することになる。ジェラルダインとは何者か、である。では、謎  
はその後どう扱われることになるのだろうか。先述の通り、ウォルポールや  
Ann Radcliffe らによる典型的ゴシック作品では、一個の語り手が謎の顕現か  
ら解決までを司っていた。そして当然帰納されるように、それら語り手の態度  
には共通して、謎の解明の意図的遅延という目的化された前提がある。しかし  
遅延とはいえ、所詮その意味することは、解消という終結が予め組み込まれて  
ある謎の未解決状態の延長である。読者に作品を読み続けさせる必要性に基づ  
く、サスペンスの維持といった作家の職業的意識が見え隠れする企てにしかそ  
れはすぎない。<sup>(7)</sup> 詰まる所、偉大なる行為者としての神を際立たせる神学的説  
明によるにせよ、また、謎と解された事象は単に感受性過剰に因る人間の錯覚  
の産物であったという理由付けにせよ、謎は主として語り手の言葉により解消  
される必然のうちにあった。<sup>(8)</sup> 読者は作品中でのその解明を約束されていたの  
である。『クリスタベル』の場合ではどうだろうか。詩が未完であるためその  
終結を知るべくもないが、語り手による謎の解消の可能性を探ることは可能で  
あろう。謎の行方をこれより跡付けるが、ゴシックの慣例に準じて予期するな  
ら、語り手は解明の遅延工作を行うはずである。

身体秘密が暴かれた後での、ジェラルダインに対する初めての言及は、語  
り手による第一部の結びにおいてみられる。語られるのは先程と同じ場面での  
その寝姿である。

And lo ! the worker of these harms,  
That holds the maiden in her arms,  
Seems to slumber still and mild,  
As a mother with her child. (298-301)

当然のことだが、謎に纏わる事柄にはふれぬ以上に有効な解明の時を繰り延べ  
る手段はない。しかしこう述べられても正体が明かされたことにはならず、よ  
って語り手の遅延への意志をここに指摘できなくもない。ところが、上の言及

は別の注意を我々に喚起せずにはおかないはずである。そこでは人物ジェラルダインに対して、悪とむしろ善といった意味的には全く異なる二種の実体性が並置されている。つまり、これらの言葉は一つの拮抗関係を現前させるのだ。言語の剝奪者の謂である“the worker of these harms”が示唆する超自然的魔性性と、主人公を抱き眠るその姿について引用最後の直喩が表す、母親のようなという属性とが厳しく対立し合う構図である。しかも、そうした実体性に関する釈義的な捩れ現象は、語り手の言葉が、“oft the while she [Christabel] seems to smile / As infants at a sudden light” (317-18) と後に続くことから、より明白に確かめられる。とすればジェラルダインとは、正体ばかりか存在するという事象のその意味の様態すら謎めく人物であるのかもしれない。しかし今問題にすべきは、語り手の行為は、この点事象の単なる言及を超越し、機能上、謎の所在の二重化つまり謎のいわば言語的な増殖をも果たしていることだ。これにおいて、我々は問うてみなければならない。寝姿についての上のような表現の有様を見出す時、語り手による謎の解決という、常套的ゴシックの結末への我々の期待は減じられることにならないだろうか。つまり、害をなす者に慈しむ母親像を認め対置させるほどに、そもそも語り手は、事物や出来事を正確に把握し且つ私見を交えず如実に言語化できるのだろうか。逆にいえば、語り手の言葉に我々はどれ程の信頼がおけるのかと問う必要があるのだ。そこで改めて振り返れば、語り手は所謂神の位置に在るという前提は必ずしも確証し得ないことがわかってくる。例えば以下の引用はどう考えられよう。後にジェラルダインと了解される人影を主人公が見付ける場面である。

Hush, beating heart of Christabel !  
 Jesu, Maria, shield her well !  
 She folded her arms beneath her cloak,  
 And stole to the other side of the oak.  
 What sees she there ?

There she sees a damsel bright,

「ジェラルダインの謎 —— 『クリスタベル』におけるゴシシズムと言語 ——」

Drest in a silken robe of white,  
 That shadowy in the moonlight shone:  
 The neck that made that white robe wan,  
 Her stately neck, and arms were bare;  
 Her blue-veined feet unsandal'd were,  
 And wildly glittered here and there  
 The gems entangled in her hair.  
 I guess, 'twas frightful there to see  
 A lady so richly clad as she ——  
 Beautiful exceedingly ! (53-68)

注目すべきは、“Hush”という呼び掛け、“Jesu, Maria, shield her well”という祈り、引用五行目の読者の驚愕を期待する疑問文である。これらはいわば自己劇化の言葉である。そしてそれらにより表現されるものは、主人公に対する庇護者的立場といった語り手の物語との関係のみならず、より本源的なもの、即ち決して客観的位置には留まっていることのできない語り手である。引用の最終部、華麗に着飾る女性を“'twas frightful there to see”と思う一方で“Beautiful exceedingly”と嘆ぜざるを得ぬような人物自身を、それらの言葉は暴露するのだ。語り手には独特の自意識があることは、作品構造からも明らかに見てとれる。二部構成の『クリスタベル』の、その各部の終りには、“The Conclusion”と称されたそれ以前の詩行とは全く異なる性格の詩行が配されており、語り手はそこで、またも自らの宗教理念をちらつかせ、出来事を繰り返し述べ総括する。これは言語上での詩全体の組織化、換言すれば固着化を目論む語り手の態度の顕れにはかならない。そこには、己を除く事件の第三者的立会人の非在性、ひいてはそのような立場にある自己の特権性を不言のうちに読者に知らしめようとする意識が窺えるのである。従って、語り手は、全知ではない、自己主張が裏打ちする強い自意識を有し且つ幾分知覚能力に優れた者と考えるのが妥当といえる。ここで、そうした語り手の語りが突然破綻し停滞する場所が、謎めくジェラルダインに関する箇所であったことを想起したい。すると、この語り

の差異化には、ゴシックにおいて慣例的な謎の扱いの形態への、その帰属性以上のことが見出されてこないだろうか。神の視座に在るとはあながちいえぬその特徴と、先にみた意味的な振れ現象を齎す、的確とはほど遠い言語使用の有様が鍵である。それらを念頭に置くと、語りの破綻は、語り手自身の、事象把握の不完全性及び言語化能力の不完全性を露呈していたと考えられないだろうか。<sup>(9)</sup> そこに、謎に関する語りの在り方に限り、詩はゴシックの伝統に則るとはいい難いと思われてくる理由がある。そして実際、第二部に入ると、こうした歪みを依然覚えさせる語り手の言葉に加え、登場人物たちもが個々に謎へと直接帰着する言語を語り始める。しかも、そこで見出せるのは、そうした謎を扱う語りの形式上の解体ばかりではない。それに伴う謎の変転という相關現象なのである。一度は身体の異質性に収斂したジェラルダインの謎が、その消失の内にも拡散し、別の謎へと一挙に転生するのである。

### III

第一部を行為の物語とすれば、語り手の言葉も含め多様な言語が交錯する第二部は発話の物語である。しかも誰の言葉であれジェラルダインに帰一する。口火を切るのは当人であり、自分は“Lord Roland de Vaux of Tryermaine” (407) の娘であると述べる。その父は実はレオラインのかつての親友であり、友の面影をそれに認めた老王は、年を忘れ途端に活気づき件の誘拐者への復讐を声高に誓う。ここで注目すべきは、家系の発現が二重の脈絡でジェラルダインを不可知な個から解放する点だ。それは本人を史的に相対化するに留まらず、その関係枠を老王にまで拡張し、後に娘の不自然に対する彼の等閑視を誘発するため、以前その身体に垣間見せた異質性は気付かれもせず封印される結果となる。<sup>(10)</sup> 謎に関与する言語の多様化が跡付けられるとはいえ、ジェラルダインの言葉は、正体を隠蔽するという意味では、依然ゴシック的である。その点は従者ブレイシーの言葉についてもあてはまる。ロランド卿への使いを命ぜられた彼がみせる躊躇の原因は、昨夜の不吉な夢にあった。その始まりは主人公と同名の鳩が苦しむ様子の目撃であり、続きを彼はこう語る。



'And in my dream methought I went  
 To search out what might there be found;  
 And what the sweet bird's trouble meant,  
 That thus lay fluttering on the ground.  
 I went and peered, and could descry  
 No cause for her distressful cry;  
 But yet for her dear lady's sake  
 I stooped, methought, the dove to take,  
 When lo ! I saw a bright green snake  
 Coiled around its wings and neck.  
 Green as the herbs on which it couched,  
 Close by the dove's its head it crouched;  
 And with the dove it heaves and stirs,  
 Swelling its neck as she swelled hers !  
 I woke; it was the midnight hour,  
 . . . . .  
 Thus Bracy said: the Baron, the while,  
 Half-listening heard him with a smile ; (541-55, 564-65)

夢を啓示と見做して、侵しつつある身近の悪を追放するべくまず周囲の森の厄払いをしてはと彼は進言するが、老王は却下する。その夢解釈の言葉は全く信憑性を勝ち得なかったのだが、そのことの帰結が問題なのだ。申し出に対して、語り手がその後一切付言せぬこととともに、彼の言葉が登場人物から如何なる肯定的反応も引き出し得なかったことは、客人の正体が語り手と主人公の心中より明かされる契機をここでも既に逸していたことを暗示する。しかし読者にとって、事情はおそらくそうではない。語り手が無言のままでもいやむしろそれ故に、余程の不注意によらなければ、客人の様々な異質性を知る読者にとり、以下のことは困難ではない。つまり従者の言葉を媒介にして、加害者ジェ

ラルダインと被害者クリスタベルという図式を想起すると同時に、邪悪な蛇女としての前者を認めることである。しかも語り手の言葉がその裏書きをするようではないか。進言を一蹴した老王に感謝しつつ主人公を瞥見する客人の様子を語り手はこう語る。

A snake's small eye blinks dull and shy;  
 And the lady's eyes they shrunk in her head,  
 Each shrunk up to a serpent's eye,  
 And with somewhat of malice, and more of dread,  
 At Christabel she looked askance ! —— (583-87)

直接に正体を示してはいないが、これにより、ジェラルダインは蛇女であることが明瞭に見出される。これらブレイシーと語り手の言語は、物語内では正体の隠蔽に加担するその一方で、読者に対しては逆にそれを言語照応的に提示するといえる。従って、詩における謎を扱う語りの変容を指摘するとともに、謎の終結をここに宣言できると思われてもそう不思議ではないかもしれぬ。<sup>(11)</sup>しかし、これも正しくはないのだ。正体を隠蔽する構造は、別の隠蔽構造を胚胎していたのである。蛇女が正体であると認められるその瞬間に、謎は地平を変え再度現前する。彼らの言語とは、実は、善悪の構図に関しては、その如何なる根拠も収奪する言語なのである。即ち、先章での振れ現象がここに再臨するのだ。まず、読みの御都合主義に陥らぬよう配慮すれば、ジェラルダインの正体が暴かれた際と同様の照応機構を通して、絡み合いつつ横たわる蛇と鳩の形状は、容易に母子と形容された二人の寝姿と呼応することに気付かされる。そのため、蛇の形態にあるとしても、害悪をなす者と母親の像が、ここでもジェラルダインの身体上で衝突する。また、さらに注目すべきは、そもそも蛇を邪悪とする判断自体が問題を孕むことだ。元来蛇とは、象徴の次元では善悪両義的な形象である。とすると、例えば豊饒神のイメージとしての蛇は、家系を語るジェラルダインの登場による病みがちな王の活力復活という先にみた変貌の機構を過不足なく説明し、その点やはり蛇女は善なる者と見做されるべきであ

る。<sup>(12)</sup> またこのことは、その人物が亡母の代りとして主人公とともに眠る場面での、母子像という安らかな形容の確かさを裏付けることにもなるのである。従者や語り手の言葉は、蛇女というジェラルダインの正体を示唆する限りにおいて、読者を謎の解明へと導く一種の読解コードである。しかし、蛇という形象を呈示することで、それらは、瞬時にその人物の関係系を母子像やレオラインの変化にまで言語上で遡及的に伸張させ、その結果、不可避的にその善悪に関わる不整合を招来していた。その点、二者の言語は、ジェラルダインの対他者的アイデンティティの不確定性という新たな謎を醸成する装置でもあるのだ。<sup>(13)</sup> そして詩は、この謎がクリスタベルをも巻き込みより一層迷宮化を進めたところで終る。蛇女ジェラルダインの関係枠は再度拡張し、言い切ってしまうえば、今ではクリスタベルも蛇女である。ロランドの家系が明かされた時、その精神は不意に前夜の寝台での“The vision of fear” (453) に捕われ、その呼吸は“a hissing sound” (459) を伴うようになった。しかし変化はそれに留まらない。彼女はジェラルダインの如く目を細めさえるのだ。

And [Christabel] passively did imitate  
That look of dull and treacherous hate !  
And thus she stood, in dizzy trance,  
Still picturing that look askance  
With forced unconscious sympathy  
Full before her father's view ——  
As far as such a look could be  
In eyes so innocent and blue !

And when the trance was o'er, the maid  
Paused awhile, and inly prayed: (605-14)

ここでも語り手は出来事の言及以上のことはしない。真似る行為の原因や意味などには全く無知の我々は、ただ、拡充した謎の有様を見定めるだけなのであ

る。<sup>(14)</sup> ブレイシーの夢解釈からクリスタベルの変貌に終る物語は、ジェラルダインの蛇に纏わる謎を新たに設えることにのみ終始する。そこで確かなことといえば、唯一、蛇というその意味の枠組みさえ不明瞭な記号が詩中で宙吊りにされているといった事態に尽きるのである。

複数の言語がジェラルダインという名の人物の表層で錯綜するため、その実体性は、いわば関係的に掠め取られ続け決して確定されることはない。この事態は、異種の言語により構成される物語性が引き起こす謎と理解できる。とすれば、『クリスタベル』は、ゴシックの常套的謎の次元を、それに関する語りの形式も含め、超克しているといえる。つまり、語り手により最後には述べられる謎解きの言葉の非在が、従来語りの中では機能していたのに対して、この詩における語りとは、作品中での謎の解明という予見を悉く否定する複数種の言語が犇めく場であるのだ。この相違はさらに、謎をその地平とする読者と詩を取り巻く特異な言語環境の現出も意味しているはずだ。まず確認したいのは、この詩にあっては、謎の解消とは後に必ず訪れる物語内の出来事ではないということだ。そして気付くべきはその逆説である。即ち、謎が解決されないそうした状況こそ、実は、我々読者による謎の解明という行為が正当化され、且つ機能し得るための要件にほかならないのである。また最早それ以外に謎が解消される方途はない。このような読者からの働き掛けを誘発する環境は、解釈の環境と名付けてもよいだろう。そしてこの観点に立つ時、ゴシックの要素ではある謎は、字義通り間言語的なものとして、極めて機能的な相貌を帯びるのだ。また、この詩全体の意味の把握はそうした読者による謎解きに基づくものといってよければ、ジェラルダインばかりか、作品『クリスタベル』も同様謎であるといっても過言ではない。そしてこの点からも、詩は従来ゴシックの基軸から分かれたるだろう。何故なら、この詩は、読者による解釈行為がなければその内容さえ一向に定立されないという意味で、それ自体では正に不可知なゴシック作品であるからなのだ。

そして、より広い視野での通時性を考慮するならば、これ迄の議論から確かめられることは、一ロマン派詩人によるゴシックジャンルの幾分特異な適用の形に留まらない。というのも、明らかに、この詩の謎の様相は、言語の問題性

と照射し合うと考えられるからである。見方を変えると、謎としてのジェラルダインの在り方は、言語の意味機能の用語で言い直せるのがわかる。それ固有の一個の実体性が確定されないことにおいて謎であるその人物は、単一のそのシニフィエが決定されないシニフィアンである。つまり、様々な言葉により雑多に呈示され示唆されるジェラルダイン像、即ち、整合することなく累積していくシニフィアンの、その豊饒性が原因となり、真の実像といった本来のシニフィエは、作品内での現出の可能性を失い、結果、非在へと追い遣られていたということだ。そこで想起しよう。こう見えてきた意味作用上の機構と全く相容れないのは、いうまでもない、18世紀特有の言語状況であるのだ。17世紀普遍言語運動に端を発すると思われるその状況は、極めて秩序的と呼ばれるに相応しいものであった。つまり、そこでは、言葉と物とは強固に連結し合い、言語の認識が即世界の認識となる。言い換えれば、言葉の意味表示機構においても、意味されるものの種類においても、曖昧性や抽象性は決して介在しない状況である。<sup>(15)</sup> そうした所謂一対一対応の表示形式からは、『クリスタベル』の謎の地平は大きく隔たる。いうなれば、そこでは、シニフィアンの過剰故に、シニフィエは抽象化し、反転して逆に距離を得、それらとの乖離状態にあるのだ。そして、この遊離の有様こそ、Michel Foucault も指摘していた18世紀末に著しく様変わりした後の言語の形状である。<sup>(16)</sup> とすれば、新たに現前したジェラルダインの謎の環境は、18世紀古典主義の唯名論崩壊後の言語の形状、即ち、シニフィアンとシニフィエの乖離という、ロマン主義に入り立ち現れた、意味作用上の言語形態を反映していたのである。これが、用語選択とは別の次元での、言語の新たな様態だったのだ。『クリスタベル』は、18世紀の所産であるゴシックの伝統を継承しつつ、言語の意味機能の形態を貫く史的な転換場面にも逢着していたのである。

#### IV

最後にゴシック詩『クリスタベル』での謎の様相は、言語の推移ばかりかジャンルの後の有様とも脈絡を持つという二つの点に簡単にふれておく。まず、

詩に見出せた謎の言語環境は、特に小説分野において後続する、代表的ゴシックでの語りの構造を暗示していたと思われる。例えば *Frankenstein* (1818) や *Melmoth the Wanderer* (1820) では、単一の語り手は消え、出来事を持続的に語るのは複数の物語内音声である。創造という業を犯した科学者やその被造物の怪物といった登場人物、その各々が物語り、また読まれるべく差し出された手紙や古文書さえ話を述べる主体であるのだ。こう多音声化された語りは、容易に作品世界を重層化するが、それだけではない。話の対象を曖昧にするなど、物語上で不連続面を余儀なく形成するのだ。<sup>(17)</sup> 従って、読者は必然的に、内容把握の段階ですら、複数の言語を関係付け整合させなければならなくなるのである。<sup>(18)</sup> とすると、読者自身がテキストを定立するという観点からすれば、それら二作品は、ジェラルダインの謎が齎す言語環境を予め既にテキスト上で構造化しているといえるだろう。

ゴシックの歴史は19世紀に至ると、恐怖の対象が超自然的事柄など外在的事象から人間の内なる側面へと移行する。抑圧下の欲望と意識との相克、抗し得ぬ罪への内在的意志の発覚とその驚愕、セクシュアリティの顕現など、一言でいえば、人間精神を攪乱に陥らせる広義の分裂現象が以後主題化されるのである。<sup>(19)</sup> そしてこうした変化も、『クリスタベル』を前世紀ゴシックの一類型としてのみ伝統の中に位置付けることを困難にさせる。というのも、先に挙げた項目は、この詩が自ずと敷設する解釈という磁場がごく自然に引き寄せる鍵語でもあるからなのだ。<sup>(20)</sup> そして以上の語りの構造及び主題についての通時的見取図から浮かび上がるのは、ゴシックの系譜における重要な分水嶺の一つとしての『クリスタベル』であるのである。

## 注

\*本稿は1990年5月20日、日本英文学会第62回全国大会（於岡山大学）においての口頭発表の原稿に加筆修正したものである。

- (1) 『抒情歌謡集』趣意書きの引用は William Wordsworth and Samuel Taylor Coleridge, *Lyrical Ballads: The Text of the 1798 Edition with the Additional 1800 Poems and the*

「ジェラルダインの謎——『クリスタベル』におけるゴシズムと言語——」

*Prefaces*, ed. R. L. Brett and A. R. Jones (London: Methuen, 1965) 7.による。

- (2) 「序文」の引用は Wordsworth and Coleridge 250-51. による。
- (3) ゴシック文学の概説、特にその18世紀中葉以降の精神的、文化的状況との影響関係については、Montague Summers, *The Gothic Quest: A History of the Gothic Novel* (1938; New York: Russell & Russell, 1964); Devendra P. Varma, *The Gothic Flame* (1957; New York: Russell & Russell, 1966); Mario Praz, "Introductory Essay," *Three Gothic Novels*, ed. Peter Fairclough (Harmondsworth: Penguin, 1968) 7-34.; Robert D. Hume, "Gothic versus Romantic: A Revaluation of the Gothic Novel," *PMLA* 84 (1969): 282-90.; William Emmet Coleman, *On the Discrimination of Gothicisms* (New York: Arno P, 1980); S. L. Varnado, *Haunted Presence: The Numinous in Gothic Fiction* (Tuscaloosa: U of Alabama P, 1987) など参照。
- (4) 『クリスタベル』の引用は全て Samuel Taylor Coleridge, *The Poems of Samuel Taylor Coleridge*, ed. E. H. Coleridge (Oxford: Oxford UP, 1912) による。以下本文中に行数のみを示す。
- (5) またヴァンパイアリズムもこの詩のゴシック性の一つである。この点 Arthur H. Nethercot, *The Road to Tryermaine: A Study of the History, Background, and Purposes of Coleridge's "Christabel,"* (1939; New York: Russell & Russell, 1962) が詳しい。
- (6) その他、クリスタベルとともに城門の敷居に差し掛かる際、ジェラルダインは矢庭に倒れるが、一旦それを越えると再び立ち上がる場所 [123-34] や、普段はおとなしい老犬がジェラルダインを見付けると突然唸る場面 [145-53] や、主人公の母親の亡霊と思しきものを退かせようと声を荒げるジェラルダインの様子 [190-213] など、いずれの場合も語り手はことの不可思議を強調する程度でそれ以上は語らない。
- (7) この辺の事情は Varma 64., 94-110. 参照。
- (8) 後者の理由付けを採るラドクリフの背景には、コモンセンスの強調と過敏な感受性の戒めというねらいがある。Nelson C. Smith, *The Art of Gothic: Ann Radcliffe's Major Novels* (New York: Arno P, 1980) 33-66. 参照。また、謎は解決され、平凡な道徳律の提示とともに話が終るといふ、いわば平衡化に向かう物語の在り方こそ、事実18世紀ゴシックで最も重視されていたことなのである。Elizabeth R. Napier.

*The Failure of Gothic: Problems of Disjunction in an Eighteenth-Century Literary Form* (Oxford: Clarendon P, 1987) 9-43. 参照。なお、ネイピアによれば、上のような理由で作品では道徳的、心理的、社会的問題が深く追及されず、そこに初期ゴシックの限界が見出せるのでもある。

- (9) 語り手の全般的な事象把握の拙さは、以下の論者たちによっても指摘されていることである。Karen Swann, "'Christabel': The Wandering Mother and the Enigma of Form," *Studies in Romanticism* 23 (1984): 533-53.; Andrew M. Cooper, *Doubt and Identity in Romantic Poetry* (New Haven: Yale UP, 1988) 107-29. 参照。
- (10) 詩の最終部、本文後述の従者ブレイシーの提言が却下された後、クリスタベルはジェラルダインの追放を言葉少なに請い、その異質性を暗示するが、それを客人に対する娘の嫉妬心故のものと老王は判断し、求めを無視することになる。『クリスタベル』: 616-55. 参照。
- (11) 例えば以下の論者による詩の解釈は、専らこの点に依存している。Humphry House, *Coleridge: The Clark Lectures 1951-52* (London: Rupert Hart-Davis, 1953) 114-41.; Charles Tomlinson, "'Christabel,'" *The Ancient Mariner and other Poems*, ed. Alun R. Jones and William Tydeman (London: Macmillan, 1973) 235-44. 参照。
- (12) この辺は野島秀勝、『自然と自我の原風景 上巻』(東京: 南雲堂、1980) 296-310. 参照。また Jane A. Nelson もこれに注目して、蛇女の、善悪、正負の両面的影響力を指摘する。Jane A. Nelson, "Entelechy and Structure in 'Christabel,'" *Studies in Romanticism* 19 (1980): 375-93. 参照。
- (13) Kathleen M. Wheeler は、蛇の象徴性、多分に性的なその鳩との絡み合い、また後の主人公による蛇の目付きの真似に着目し、含意的には蛇も鳩ともにクリスタベルとジェラルダイン双方の属性を有するとして、従者の言葉全体の曖昧性を指摘する。Kathleen M. Wheeler, "Disruption and Displacement in Coleridge's 'Christabel,'" *The Wordsworth Circle* 20 (1989): 85-90. 参照。また両義的な蛇の形象の他、ジェラルダインは、両性具有であるとか、デーモンと天使の両面を備えているなど指摘されるが、そうしたことは逆説的に、その実体性の確定され難さを示すと考えられる。両性具有は前掲野島をはじめ度々指摘されている。他に例えば Harold Bloom, *The Visionary Company*, revised and enlarged ed. (Ithaca: Cornell UP, 1971) 212-17. 参



- 照。また後者については Edward Strickland, "Metamorphoses of the Muse in Romantic Poesis: *Christabel*," *ELH* 44 (1977): 641-58. 参照。
- (14) 目付きを真似る主人公の顔の変化は、彼女のばかりか、ジェラルダインのアイデンティティをも識別不能にさせるのである。顔面の相似が互いのアイデンティティを錯乱させる機構については Eve Kosofsky Sedgwick, "The Character in the Veil: Imagery of the Surface in the Gothic Novel," *PMLA* 96 (1981): 255-70. 参照。
- (15) ここの議論は主に Michel Foucault, *The Order of Things: An Archaeology of the Human Sciences*, trans. Tavistock Institute (New York: Vintage Books, 1973) 81-92.; Hans Aarsleff, *From Locke to Saussure: Essays on the Study of Language and Intellectual History* (Minneapolis: U of Minnesota P, 1982); パオロ・ロッシ、『普遍の鍵』、清瀬卓訳（東京：国書刊行会、1984）に負っている。
- (16) Foucault 217-343. 参照。
- (17) ゴシック小説での物語上の不連続性については Eve Kosofsky Sedgwick, *The Coherence of Gothic Conventions* (New York: Arno P, 1980) 9-39. 参照。なおセジックは、こうした物語構造上の特徴が、ロマン主義的な主観と客観の問題にも関係すると指摘する。
- (18) この点はジャン・B・ゴードン、「廃墟としてのテキスト——ゴシック意識の考古学——」、志村正雄訳『城と眩暈——ゴシックを読む——』小池滋他編（東京：国書刊行会、1982）390-430. 参照。
- (19) この辺の事情は前出スミスに詳しい。Smith 参照。なお、先に本文でふれた多音声化されている語りの構造は、人間の複雑な内面の様子を表現する際の優れて有効な叙述形式なのである。詳細は Linda Bayer-Berenbaum, *The Gothic Imagination: Expansion in Gothic Literature and Art* (London: Associated UPs, 1982) 参照。また、こうした移行に関連して、Marshall Brown は、『フランケンシュタイン』と『放浪者メルモス』を例に、18世紀啓蒙主義以降、ゴシックジャンルは人間の存在論的意味及びその生の起源を探究するための超越的思弁のモードとなった、と論じている。Marshall Brown, "A Philosophical View of the Gothic Novel," *Studies in Romanticism* 26 (1987): 275-301. 参照。
- (20) クリスタベルとジェラルダインとが相関関係にあると見做して、それを心的力学の

観点から解釈する試みがこの場合の事例に相当する。意識と無意識の葛藤という図式は以前から度々示され、より具体的で比較的最近の例では以下を参照。Jonas Spatz, "The Mystery of Eros: Sexual Initiation in Coleridge's 'Christabel,'" *PMLA* 90 (1975): 107-16. 成長に伴うセクシュアリティへの両義的態度。Edward Dramin, "'Amid the Jagged Shadows': *Christabel* and the Gothic Tradition," *The Wordsworth Circle* 13 (1982): 221-28. 罪の原因の内在性。Cooper 107-29. 道徳的弱さに露呈する意志力の本質的脆弱さ。Camille Paglia, "'Christabel,'" *Samuel Taylor Coleridge*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House, 1986) 217-29. キリスト教義成立以前の、原初的且つ内在的性的混沌下における精神状態。